



「豊かな遊びをつくるおもちゃ」

——障害児の発達を考える——

H. S. ヘルツカ・ビンズワンガー著
川端利彦・新谷浩堆・S. ハイノリッヒ訳

子どもにとっておもちゃは実に多くの役割を果たしている。ドイツ・ユネスコ協会の就学前教育の内容と目標についての勧告書によれば「おもちゃは知識・情緒・自発的な想像力・社会協力の領域で、子どもに影響をおよぼす。」とある。このようにおもちゃ（遊びもそうである）を通して身体的には勿論のこと、精神的にも発達していくのである。適切なおもちゃとの出会いこそ、全人間的発達を促すものである。のみならず、時におもちゃは子どもとわれわれおとなとの橋渡しの役割をも演じてくれるのである。われわれが小児のリハビリテーションの中でおもちゃを利用することの所以がここにある。

本書はスイスの小児精神科医、H. S. ヘルツカ博士ら

により子ども（0歳～7歳）の身体的、精神的発達に応じたおもちゃが紹介されている。そしてただ単に紹介のみに終ることなく「子どもにおよぼす物の影響」「障害児、その遊びとおもちゃ」と、小児精神科医ならではの子どもへの深い認識のもとに実に幅広い立場で捕えている。

本書が障害児に係わるセラピストには勿論のこと、両親をはじめ医学・教育・育児の分野等、広く、子どもに係わる人の目に触れることを願う。

（A 4, 76 頁, Br. ジョルダン社発行, パシフィックサプライ株式会社販売, 1977.）

（自治医科大学附属病院リハ・センター, 作業療法士

篠崎直子）

(The Neurophysiological Basis of Patient Treatment) A Programmed Text Volume 1. The Muscle Spindle

C. C. Crutchfield and M. R. Barnes 著

この本は現在流行の計画的学習方法を取り入れて、筋紡錘とそれに直結している神経線維との関係を理学療法と結びつけて書かれたものである。頁数は130頁で、その中に258の問があり、それがやさしい順に多数の図入りで示されている。最後の問を終ったと同時に筋紡錘についての理解も出来上がるようになっている。一般に、Rood法は理解しにくいと云われていますが、そのRoodが1975年、秋のシカゴでの2週間の講習会でこの本をテキストとして使用した。その時、Roodが『この本は私の講義を理解していただくのに非常に役立つものです』と云って、その講習中に多用した。中枢神経系疾患の治療にあたって常にPT、OTの悩みの種である促進と抑制について臨床経験でなんとなくわかっていたことからを更に明確にしてくれると期待してよいと思われる。もう一つ強調したいことは、著者がこの本を書くに

あたって参考にした本のいくつかは相当難解だと云われているが、それをPT、OTにとって重要と思われるところを非常にうまくまとめている。一つだけ例をあげると、伸展筋の刺激の方法は関節可動域とも関係して基本的には2通りだけであるが、逆に屈筋を促進する方法は4通りもある。極端に云えば、十分に注意をして筋の促進を行なわないと伸筋を促進しているつもりでも屈筋を促進している可能性があるということまでこの本は教えている。Volume IIも昨年中には出版されると聞いていたがまだのようである。

定価は米ドルで、\$ 7.80、出版社は、Stokesville Publishing Company, Box 4016, Morgantown, West Virginia 26505.

（清瀬リハビリテーション学院, 理学療法士 伊藤直栄）